

道頓堀に戎橋が架かると、南へと延びる通りに面して、商店が軒を連ねていきます。さらめくネオン、弾ける賑わい。飛び交う会話、商人たちの白熱。戎橋筋商店街の誕生物語——。



商店街・黎明期

田畑から夕涼みの名所へ

戎橋が道頓堀に架かったのは、道頓堀が開削された頃です。道頓堀の開削が元和元年(1615)なので、およそ400年前のことになります。戎橋はその名が示すとおり、そもそも今宮神社の参道であったと言われますから、「戎橋筋」も橋の架設と同時に成立したと言えます。「参道」の趣が強かった頃、戎橋筋はどのような場所だったのでしょうか。

道頓堀に面して戎橋筋の西側が九郎右衛門町、東側が吉左衛門町、以下北から順に本塚町(千日前通の一つ北側の路地まで)、本相生町(現在の千日前通・高速道路辺りまで)と町場が続き、その南に溝の側(難波センター街)を限りとして、難波新地が広がっていました。その当時、どんなお店があったのかは定かではありませんが、心齋橋筋から連なる商店が軒を連ねていたと思われます。難波新地は難波村の土地で、いまだ



「浪華茶里八景」(大阪市立中央図書館所蔵)

閑散とした田んぼや畑が広がっていました。

宝暦7年(1757)に出版された『絵本十日戎』は、戎橋から今宮戎社までの行程を描いた貴重な資料です。それぞれの場所の確定は難しいのですが、5枚目に瓦屋根と遠景に寺院らしきものが描かれていることから、難波御蔵付近と考えられます。それより前の4枚目までが現在の戎橋筋商店街を描いたものでしょう。



5



「絵本十日戎」(肥田晴三氏所蔵) ※1枚目は18ページを参照

商店街・発展期

道頓堀に劣らない繁盛ぶり

明治31年(1898)2月の宇田川文海・長谷川金次郎編『大阪繁昌誌』には、このような記述があります。

戎橋の南詰より、阪堺鉄道難波停車場に至る間は、道頓堀に劣らざる繁昌地にして人の往来甚だ雑沓を極む、此筋に南吉楼、浜吉楼、丸万料理店、六兵衛善哉等ありて殊に世に知らる戎橋筋が道頓堀と並ぶ繁華街であったこと、特に有名な数軒の料亭があったことが分かります。東側には北から南へ向かって楠本洋服店以下39店舗、西側には橋屋饅頭店以下38店舗の店が列記されています。

明治33年(1900)に編纂された『大阪営業案内』には、難波停車場から戎橋までのお店の様子が記録されています。これによると、南吉楼は現在のなんばマルイの南側、六兵衛善哉はサンマルクカフェ辺りにありました。

45年(1912)1月16日の未明、銭湯を火元として火災が発生。火は瞬間にミニミー帯に広がり、被害戸数4,779(内、全焼4,750)、死者4、罹災面積10万946坪(33.3ha)に及びました。いわゆる「南の大火」です。

これによって都市計画、防災の観点から東西の千日前通が建設され、戎橋筋は南と北に分断されることになりました。現在、高速道路が走っている場所に市電が引かれ、戎橋筋との交差点上に「戎橋筋」の停留場が設けられました。



「浪花のながめ」(大阪市立中央図書館所蔵)

煙草屋、御菓子屋、蒲鉾屋、うどん屋などが軒を連ねています。

明和2年(1765)、難波新地が開発されて以降、夕涼みの名所として知られるようになりました。さまざまな新地繁栄策が講じられ、茶屋株・風呂屋株・湯屋株・勸進相撲株が許可される一方、地固めとして軽業・見世物などの興行が催されました。

「浪華茶里八景」では、難波新地成立直後、夕涼み場になって間もない頃の戎橋筋の様子が描かれています。瓦屋根が軒を連ねた向こう側には、提灯をつった夕涼み屋や休憩所が立ち並んだ姿、「麦畑よりうり・なすび・綿畑の面影もなく、即時に納涼の地となるも浪花繁栄のしるし」と書かれています。

やがて寛政3年(1791)ごろ、難波新地3丁目(現在の難波2丁目)に相撲場や能舞台が建設され、大いに賑わっていたことが記録に残されています。夕涼み場は、戎橋筋沿いの難波新地2丁目の南端と溝の側が接する辺りに移っていきました。その一方、見世物小屋などの興行が、難波新地で次第に増えてきました。

天保期に入ると難波新地から夕涼み場は姿を消し、見世物小屋や町家が軒を連ねるようになっていきました。幕末期には溝の側を越えて南側は新戎町となり、場所の変遷はあるものの、見世物小屋が立ち並んでいました。また溝の側北側(後に南側に移る)には松の尾、登加久という料亭も建てられました。



「道頓堀ニュース」(大阪市史編纂所蔵)

中野山録堂匠意

南海鉄道株式会社
難波駅

商店街・大大阪時代

モボ・モガが集う流行の源泉地

大正14年(1925)4月、関一市長の下、市域拡張政策によって大阪市はわが国第1位、世界第6位の人口と面積を持つ巨大都市になりました。いわゆる「大大阪」時代の到来です。電気・ガス・水道・市電・道路・建築など都市の基盤が整備され、大阪は近代的な都市として大きな変貌を遂げていきます。人々はモボ(モダンボーイ)・モガ(モダンガール)に代表される大阪モダニズム文化を謳歌しました。

『道頓堀ニュース』と題された当時のタウン紙には、ミナミの街を「演芸映画という芸術のデパート、慰安遊興のデパート、食的嗜好のデパート、趣味流行のデパートを総合したもので、大大阪の持つ大きな権威であり又誇り」と説明して、「来りて此処に大大阪の粋を求めよ」とうたい上げています。心斎橋筋から連なる戎橋筋商店街について、当時の本には「昼は人の流れの激しさに驚かされ、夜は狭い街路を飾る街路灯と、ショーウィンドーのきらめきに眼を眩するばかり。そこを店毎にのぞく婦人連、田舎出の老爺老婆、

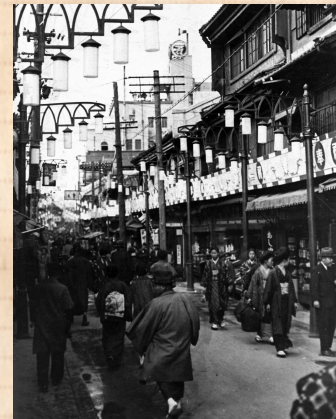


大正時代の難波新地五番町付近(現在のミズノ通り)

中でも学生帽が目立つて多い。夕は会社帰りのサラリーマン、手を取合ふかれ氏かの女が肩をすり合つて流れちがふ。そしてこの行く人々は、流行の衣服をまとひ、新型の帽子をいたゞき、モダンな街にモダンな雰囲気まき散らし、楽しみに左右のきらびやかな飾窓を眺める。」(東出清光編『大阪案内』、昭和11年1月、大阪之商品編輯部)そして「大阪流行の源泉地」であり、「このもつ不思議な魅力に誘はれて、新奇なものを好む、流行に憑かれた人々が競つて集まる場所」と紹介されています。戎橋筋商店街は第一級の商業地であるとともに、大阪における「最先端の文化発信の場」でもあったのです。



大正時代のチラシ(橋爪節也氏所蔵)



昭和3年(1928) 戎橋筋の様子(提供:朝日新聞社)

商店街・復興期

復興の先陣を切って

やがて戦争が始まり、「ぜいたくは敵だ!」のかけ声の下、国民精神総動員運動・戦時市民生活運動など市民生活にも暗い影が忍び寄ります。切符配給制度による販売統制、ファッションの統制、ネオンサインの禁止、天神祭・水都祭など祭礼の自粛、興亜奉公日の設定など、華やかだった大阪の姿は一変していきました。太平洋戦争が始まると、空襲に備えて建物の強制疎開や、縁故疎開・学童集団疎開など、より一層厳しい状況になりました。

昭和20年(1945)3月13日から14日にかけて、[B29] 272機によって大阪大空襲が行われました。被災地域は浪速区・西区・港区・大正区・西成区・天王寺区・中央区に及び、被災面積21.0km²、被災戸数13万6,107戸、被災者は50万1,578人を数えました。

戎橋筋商店街も灰燼に帰します。(A)は千日前通の戎橋筋交差点から北を望んだ写真です。日本昼夜銀行、丸万ビル(三笠屋ビル)、アドビル(現、かに道楽)、大阪松竹座の背面などが写っています。戦争はミナミの街にも大きな爪痕を残して終わりました。

まだ焼け跡残る20年10月、南区商店街連合会(南区商連)は、他の民間諸団体に先駆けて復旧されました。ミナミの町衆の心意気を示すとともに、大阪の



(A) 戦禍の傷跡まなましいミナミの街

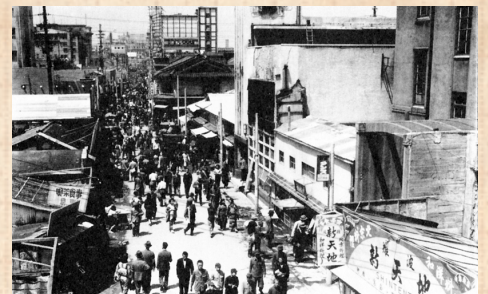


昭和37年(1962) 初代アーケード完成記念パレード

復興はまずミナミの街からという意図もあったと思われます。大阪の商業が戦災復興の兆しを見せ始めるのは、昭和23、4年(1947、48)頃からです。戦時中から続く配給統制が緩和されたことで自由な商業活動が行われ、戎橋筋商店街も復興を遂げていきました。

爾来、幾星霜、戎橋筋商店街の現在の店舗数はおよそ100店舗。今も昔も商都大阪の経済を支え、大阪文化の発信地として人々に親しまれ、愛されています。ここに集う時、人は大阪のぬくもりに包まれます。

文・古川武志(大阪市史料調査会)



戦後間もない頃の戎橋筋商店街(提供:高橋俊郎氏)